楠本端山の世界―『端山先生遺書』　詩　訳注（その六）

松崎　賜・吉田仁士[1]・林　浩俊[2]

あらまし　本『研究報告』第四十一号掲載分に引き続き、幕末維新期の儒学者である楠本端山の漢詩を訳注する。今回とりあげた二つの作品も、政務に直接かかわらない、静かで落ち着いた生き方と、それを取りまく自然とをうたうことを全体の基調としている。なおかつ、その中に、宋儒の思想と論理とが、詩的感興をいっそう高める素材として絶妙に埋めこまれているのである。宋儒は、中国思想の伝統をふまえて思索し、伝統の成果を活かしつつも、なお儒が儒である所以を求めて、きびしく思想形成の道を歩んでいった。儒は、世に出るにせよ退隠するにせよ、現実社会を治めることをあくまでも理想に据える。したがって儒の論理には、儒的な実践とはどのようなものかが、おのずとにじみ出てくる。儒には儒ならではの生命力があって、端山の詩は、それを実感させてくれるような表現がなされているわけである。彼の作品は、儒教道徳を観念的に称揚するためにつくられたのではない。【解説】【注】においては、宋儒また端山の本領が中国思想全般の傾向とともに大まかにではあれ把握できるよう配慮して、関係資料を引用した。

キーワード　［鳶飛魚躍、自得、観川流、静、無極翁］

一　この訳注（その五）に関わる端山年譜

一八五八年（安政五年　戊午）三十一歳

二月、始めて家祭を行う。朱子の『家礼』にならう。三月、病のため、間退を請い、家にあって教授する。七月十八日、長男、之璘生まれる。

※『楠本端山碩水全集』[3]所収の自著年譜をもとにした。

二　訳注

①（四十四）　田園雑興

【原文】

粛々霜後霽、青々麦苗抽。天徹飛鳶冲、淵澄躍魚浮。一臥南山下、歳月独悠々。扶病出柴戸、薄言渉林丘。撫松愛寒景、顧影寡侶儔。心澹々於水、身閑々似鴎。渾忘位外事、到処儘優游。超然多自得、植杖観川流。

【書き下し文】

粛々として霜後に霽れ、青々として麦苗抽ず。天は徹して飛鳶沖り、淵は澄みて躍魚浮く。一たび臥す南山の下、歳月独り悠々たり。病を扶けて柴戸を出で、薄か言に林丘を渉る。松を撫して寒景を愛し、影を顧みれば侶儔寡し。心は澹として水よりも澹に、身は閑として閑なること鴎に似たり。渾て位外の事を忘れ、到る処儘く優游たり。超然として自得多し、杖を植てて川流を観る。

【口語訳】

霜が降りやんだあと、あたりは静かで清らかであり、麦の苗が伸びてきて青々としている。天は晴れ渡り鳶が高く飛んでいき、川の流れは澄み切って魚が元気よくはねている。ひとたび南山の麓に退いて暮らしてい

て、時間だけが悠々と過ぎ去っている。病をおしてあばら屋の外に出、しばらく野山を散策する。松に寄りかかって、このひっそりとした景色を愛でつつ、自分のまわりを振り返ってみると、ともがらになるようなものもない。私の心はあっさりとしていて水よりも淡く静かであり、身はのどかにくつろいでいてまるでカモメのようである。自分にふさわしいこの暮らし以外のことをすべて忘れ、どこに行ってもゆったりのびのびしている。世俗のごたごたからかけ離れて心に悟ることが多い。杖を立てたまま川の流れに見入っている。

【注】

○蕭々…厳かで深いありさま、身を引き締めつつしんだありさま、静かで清らかなありさまなどを表す。嵇康の「琴賦」（『文選』巻十八）に「竦肅肅として以て静謐に、密微微として其れ清閑なり。」とある。また、陸機の「秋詠」に「肅肅たり素秋の節、湛湛として濃露凝る。」とある。また、陳後主元秀の「五言、画堂の良夜に長在節を履み、歌管もて詩を賦し、筵を迥ねて酒を命ず、十韻にて篇を成す」に「肅肅たり凝霜の下、峩峩として層冰合す。」とある。なお、風のはげしく吹くさまの例としては隋の煬帝の「飲馬長城窟行」に「肅肅として秋風起こり、悠悠として行くこと萬里なり。」とある。また、王粲の「蔡子篤に贈る詩」（『文選』巻二十三）に「烈烈たり冬の日、肅肅たり凄き風。」とある。　○霽…霜や雪が降り止むこと。○青々…曹操の「短歌行」（『文選』巻二十七）に「青青たる子が衿、悠悠たる我が心。」とある。植物の例としては、屈原の「九歌二首」（『文選』巻三十三）に「秋蘭は青青として、緑葉と紫茎あり。」とある。また、「古詩十九首」其の二（『文選』巻二十九）に「青青たる河畔の草、鬱々たる園中の柳。」とある。同じく其の三に「青青たる陵上の栢、磊磊たる澗中の石。」とある。また、「飲馬長城窟行」（『文選』巻二十七）に「青青たり河辺の草、綿々として遠道を思う。」、「長歌行」（『文選』巻二十七）に「青々たり園中の葵、朝露は日を待ちて晞く。」とある。また、王維の「渭城曲」に「渭城の朝雨軽塵を浥し、客舎青青柳色新たなり。」とある。　○麦苗…王維の「渭川の田家」に「斜陽は墟落を照らし、窮巷に牛羊帰る。野老は牧童を念い、杖に倚りて荊扉を候う。雉雊きて麦苗秀で、蚕眠りて桑葉稀なり。田夫は鋤を荷いて至り、相い見て語ること依依たり。即ち此に間逸を羨み、悵然として式微を吟ず。」とある。また、白居易の「杜陵の叟　農夫の困しみを傷めるなり」に「三月雨無くして旱風起こり、麦苗秀でず多く黄死す。」とある。　○抽…芽ぐむ、ぬきんでる。　○徹…かなたまで澄み渡っている様子。　○冲…沖の俗字。奥深くむなしいこと、あるいは、登り到ること。『韓非子』喩老篇に「飛ぶ無きと雖も、飛べば必ず天に冲り、鳴く無きと雖も鳴けば必ず人を驚かす。」とある。また、『史記』滑稽列伝にも同様の文がある。　○飛鳶冲…曹植の「名都篇」（『文選』巻二十七）に「余巧未だ展ぶるに及ばず、手を仰いで飛鳶を接く。」とある。また、王維の「聖製玉真公主の山荘に幸し、因りて石壁に題す十韻の作に奉和す、応制」に「庭は沖天の鶴を養い、渓は上漢の査を流す。」とある。また、孟浩然の「田園作」に「峴山にて蕭員外の荊州に之くを送る」に「再び飛べば鵬は水を激し、一たび挙がれば鶴は天に沖る。」とある。　○躍魚…『中庸章句』第十二章に『詩経』大雅旱麓篇の句を引いて、「詩に云う、『鳶は飛んで天に戻り、魚は淵に躍る。』と。其の上下に察らかなるを言うなり。」とある。朱子の注によれば、直接的には感覚できない天地宇宙の「理」が「化育流行」していることは天地のあらゆるものをみれば明らかにわかるというのである。なお、『荘子』秋水篇に、魚の游ぐのを見て荘子が恵子に、あれが魚の楽しみだ、と言ったという話があり、後世では人と物との一体とか、万物自得のありさまのたとえとして「躍魚」が使われることもある。詩の例としては、張衡の「東京賦」（『文選』巻三）に「渚には躍魚戯れ、淵には亀蟭遊ぶ。」とある。また、左思の「魏都賦」（『文選』巻六）に「奔亀躍魚、呂梁を睽るがごとき有り。」とある。また、李白の「送別、書の字を得たり」に「日落ちて帰鳥を看、潭は澄みて躍魚を羨む。」とある。　○一臥…「臥」は寝る、或いは病気にかかって寝ることであるが、一般に仕官していない状態、あるいは隠遁生活のことをも意味する。白居易の「初めて漢江を下る、舟中にて作り両省の給舎に寄す」に「一食し飽きて夜に至り、一臥し安んじて晨に達す。」とある。同じく

「王処士の郊居に題す」に「一たび江村に臥して来のかた早晩、書を著わし帙に盈たして鬢毛斑らなり。」とある。　○南山…隠棲する場所として象徴的に使われる表現。終南山（甘粛省から陝西省を経て、河南省に至る諸山脈）としての例は多い。陶淵明に関していうのであれば廬山。淵明は、その山麓に住んだ。陶淵明の「飲酒二十首」其の五に「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る。」とある。同じく「園田の居に返る五首」其の三に「豆を種う南山の下、草盛んにして豆苗稀なり。」とある。　○歳月…陶淵明の「劉柴桑に和す」に「栖栖たり世中の事、歳月と共に相い疏なり。」とある。また、張九齢の「荊州城に登りて江を望む二首」其の二に「東望何ぞ悠悠たる、西来昼夜流る。歳月既に此くの如し、心の為に那ぞ愁えざらん。」とある。また、王維の「春田、裴迪に与え新昌里に過る、呂逸人を訪うに遇わず」に「戸を閉じ書を著わして歳月多し、松を種え皆な老いて竜鱗と作る。」とある。また、孟浩然の「白鶴巌に張子容の隠居を尋ぬ」に「歳月に青松老い、風霜に苦竹疏なり。」とある。　○悠々…「丙辰新年作二首　其の一」の【注】(4)を参照。なお、張九齢の「西江の夜行」に「遥夜に人何くにか在る、澄潭月裏に行く。悠悠として天宇曠く、切切たり故郷の情。外物は寂として擾る無く、中流は澹として自ら清し。帰るを念ずれば林葉換わり、愁坐すれば露華生ず。猶お汀洲の鶴有り、宵分に乍ち一鳴す。」とある。

○扶病…病気をおして無理に起きる。病気の身をささえる。「扶疾」に同じ。白居易の「縛戎の人　窮民の情に達するなり」に「病を扶け徒より行くこと日に一駅、朝餐飢渇して杯盤を費す。」とある。同じく「臨都駅にて崔十八を送る」に「言う勿かれ臨都五六里と、病を扶け城を出で相い送り来たる。」とある。同じく「張籍に答えて因りて以て書に代う」に「今日正に間にして天又た暖かなり、能く病を扶け暫く来るべきや無や。」とある。同じく「皇甫郎中が親家翁、絳州に赴任するの宴、城を出づるを送りて贈別す」に「群を離れ相い恋うる意を識らんと欲して、君が為に病を扶けて都城を出づ。」とある。　○柴戸…柴で作った戸。粗末な家。あばら屋。「柴扉」「柴荊」も同じ。名利にとらわれない生活をしていることを表す。孟浩然の「張子容道士の挙に赴くを送る」に「夕嘯に山照滅し、客を送りて柴戸を出づ。」とある。また、白居易の「小台に晩坐して梦得を憶う」に「月明かにして柴戸を候う、藜杖何れの時にか来たらん。」とある。　○林丘…林とおか。一般に山林というほどの意。隠棲の地を指すこともある。謝恵連の「西陵風に遇い康楽に献ず」（『文選』巻二十五）に「零雨は墳沢を潤し、落雪は林丘に灑ぐ。」とある。また、張九齢の「楽遊原に登り春望し懐いを書す」に「願わくは言に好む所に従い、初服して林丘に返らん。」とある。同じく「王司馬の入計するに餞す、同じく洲の字を用う」に「元僚行くゆく上計す、餞を挙げて林丘に出づ。」とある。また、王維の「大散自り以往は深林密林にして蹬道盤曲す、四五十里にして黄牛嶺に至り黄花川を見る」に「回環して徒侶を見れば、隠映して林丘を隔つ。」とある。また、李白の「張卿の南陵に夜宿して贈らるるに酬ゆ」に「我れ昔林丘を辞し、雲竜忽ち相い見る。」とある。また、白居易の「呉舟に贈る」に「人間に間地有り、何ぞ必ずしも林丘に隠れん。」とある。　○撫松…撫は手でさする、よりかかる。陶淵明の「帰去来兮の辞」に「景は翳翳として以て将に入らんとし、孤松を撫でて盤桓す。」とある。　○寒景…基本的には冬の季節の陽光をさす。前注の「景」云々は日没のこと。だが、ここでは文脈にかんがみ、とりあえず【口語訳】のように訳しておく。白居易の「三月三十日の四十韵に和す」に「江南に臘日半ばにして、冰凍凝ること瘀するが如し。寒景尚お蒼茫たるも、和風已に吹噓す。」とある。　○顧影…自分の姿を顧みてほこる。『三国志』魏書巻九、何晏伝に引く『魏略』に、「晏は性自ら動静を好み、粉白は手を去らず、行歩して自ら影を顧みる。」とある。自らの才能を誇る、自負するという意味にもなる。「顧景」も同じ。ただし、「顧景慚形」は栄誉などが得られずに羞じる、「顧影自憐」は物事がうまくいかず失望し苦しむの意味にもなる。王維の「冬夜に懐いを書す」に「漢家方に少きを尚ぶ、影を顧みて朝謁を慚づ。」とある。また、孟浩然の「黄侍御と水津に舟を泛ぶ」に「津に蛟竜の患い無く、日夕常に安流たり。本と驄馬を避けんと欲す、何ぞ知らん鷁舟に同じきを。豈に伊に今日幸いす、曾て是れ昔年遊ぶ。琴中の鶴を奏すること莫く、且く波上の鴎に随う。堤は縁る九里

の郭、山は面す百城の楼。自ら顧みるに躬耕の者、才は管楽の儔に非ず。聞くならく君草沢を薦むと、此れに従いて滄洲に泛かばん。」とある。また、李白の「北山に独酌して韋六に寄す」に「壺を傾けて幽酌を事とし、影を顧みて還た独り尽くす。」とある。同じく「江夏にて友人を送る」に「裴回して相い影を顧み、涙は下る漢江の流れに。」とある。

○侶儔…つれ、ともだち。「儔侶」に同じ。嵇康の「秀才の軍に入るに贈る十九首」其の十九に「徘徊して儔侶を恋い、慷慨す高山の陂に。」とある。また、張華の「情詩五首」其の五に「未だ曽て遠く別離せず、安んぞ儔侶を慕うを知らんや。」とある。また、江夏王義恭の「艶歌行」に「悲鴻は良匹を失い、俯仰して儔侶を恋う。」とある。また、王維の「鄭州に宿す」に「他郷に儔侶を絶ち、孤客は僮僕に親しむ。」とある。

○澹…あっさりと淡いさま。心が静かに動かないさま。『老子』第二十章に「澹として其れ海の若しく、漂として止まる所無きが若し。」とある。また、王維の「戯れに張五弟諲に贈る三首」其の一に「吾が弟東山の時、心尚きこと一に何ぞ遠き。日高くして猶お自ら臥し、鐘動きて始めて能く飯す。領上に髪未だ梳らず、牀頭に書巻かず。清川ともに悠悠たり、空林対いて偃蹇たり。青苔は石上に浄く、細草は松下に軟かし。窓外に鳥声間かにして、階前に虚心善し。徒然として万象多く、澹爾として太虚緬かなり。一に知る物と平なることを、自ら顧みるに人の為に浅し。君に対いて忽ち自得す、浮念遣るを煩わず。」とある。　○閑…静かなさま。のどかなさま。用がなく暇なさま。白居易の「閒居」に「旦従り直ちに昏に至り、身心一に無事なり。心足れば即ち富為り、身閒なれば乃ち貴に当たる。富貴此の中に在り、何ぞ必ずしも高位に居らん。」とある。同じく「秋池二首」其の一に「身閒にして為す所無く、心閒にして思う所無し。」とある。同じく「地上即事」に「身閒にして貴に当たるは莫に天爵、官散じて憂い無きは即ち地仙たり。」とある。同じく「首夏」に「兀爾として水辺に坐し、翛然として橋上に行く。自ら問う一に何くにか適う、身閒にして官軽からず。」とある。同じく「詠懐」に「人生百年の内、疾速なること隙を過ぐるが如し。先づ身の安閑なるに務めて、次に心の歓適ならんことを要す。事は得て失うこと有り、物は損して益すること有り。所以に道を見る人、心を観て跡を観ず。」とある。同じく「斎月の静居」に「病み来りては心は静にして一も思う無く、老い去りては身は閒にして百も為さず。」とある。　○鴎…たとえば「鴎心」は隠者の自由の心境、「鴎沙」は隠者の住まい、「鴎波」は隠者の自由な生活、「鴎情」は隠遁の心情、「鴎閑」は隠者ののどかな生活を表す。『列子』黄帝篇に「海上の人に漚鳥を好む者有り。毎旦海上に之き、漚鳥に従ひて遊ぶ。漚鳥の至る者、百もて数うれども止まず。其の父曰わく、『吾れ聞く。漚鳥皆な汝に従いて遊ぶと。汝取り来たれ、吾れ之れを玩ばん。』と。明日海上に之けば、漚鳥は舞いて下らざるなり。故に曰わく、至言は言を去り、至為は為す無し、斉智の知る所は則ち浅しと。」とある。また、謝霊運の「瞿渓山に過りて僧に飯す」に「懐いを忘るれば鴎鯈を狎れしめ、生を摂すれば兕虎を馴れしむ。」とある。また、陶淵明の「斜川に遊ぶ」に「気は和やかに天は惟れ澄み、坐を班ちて遠流に依る。弱湍には文鮪馳せ、閑谷には鳴鴎矯がる。迴かなる沢に游目を散じ、緬然として曽丘を睇む。九重の秀微しと雖も、顧瞻するに匹儔無し。壺を下げて賓侶に接し、満を引いて更ごも献酬す。」とある。また、盧照鄰の「東山谷口を過る」に「跡は人間の俗と異なり、禽なること海上の鴎に同じ。」とある。また、張九齢の「渓行して王震に寄す」に「山気朝来爽かに、渓流自ら清に向う。遠心何れの処にか愜わん、間棹此の中に行く。叢柱は林間に待ち、群鴎は水上に迎う。徒然として我が願いに適う。幽独誰が為に情ある。」とある。同じく「初めて江陵を発して懐い有り」に「扁舟此れ従り去り、鴎鳥自ら群を為す。」とある。同じく「城南隅の山池、春中にして田袁二公盛んに其の美を称す、夏首賞するを獲、果して夙言に会す、故に此の詠有り」に「楽処には鴎を将て狎れ、譚端には馬を用て斉し。」とある。また、王維の「積雨輞川荘の作」に「山中に習静して朝槿を観、松下に清斎して露葵を折る。野老は人と席を争うこと罷む、海鴎何事ぞ更に相い疑わん。」とある。また、孟浩然の「秦中苦雨して帰るを思い袁左丞賀侍郎に贈る」に「躍馬は吾が事に非ず、狎鴎は我が心に宜し。」とある。同じく「山に還りて湛法師に貽る」に「冥滅の意を知らんと欲すれば、朝夕海鴎に馴

れん。」とある。また、李白の「崔八丈の水亭に過る」に「間に白鴎に随いて去り、沙上自ら群を為す。」とある。同じく「江上の吟」に「仙人待つ有り黄鶴に乗じ、海客心無くして白鴎を随う。」とある。同じく「古風」其の四十二に「揺裔たる双白鴎、鳴きて飛ぶ滄江の流れ。宜しく海人と狎るべし、豈に伊れ雲鶴の儔ならんや。影を寄せて沙月に宿し、芳に沿いて春洲に戯る。吾れも亦た心を洗う者、機を忘れ爾に従いて遊ばん。」とある。また、白居易の「翰林院の中にて秋を感じ王質夫を懐う」に「跡を寄す鴛鷺の行、心を帰す鴎鶴の群。」とある。同じく「開元寺の東池早春」に「気に順いて草は熏熏たり、情に適いて鴎は汎汎たり。」とある。同じく「秋日、張賓客舒著作と同じく竜門に遊び酔中に狂歌す、凡そ二百三十八字」に「荷は衰えて黄ならんと欲するも荇は猶お緑なり、魚は楽しみて自ら躍るも鴎は驚かず。」とある。なお、杜甫の「旅夜懐いを書す」の「名は豈に文章もて著われんや、官は応に老病にて休むべし。飄飄何の似る所ぞ、天地の一沙鴎。」は著名であるが、この「鴎」はむしろ孤独感の象徴である。　○忘位外事…『論語』泰伯篇に「子曰わく、『其の位に在らざれば、其の政を謀らず。』と。」とある。同じく憲問篇に「子曰わく、『其の位に在らざれば、其の政を謀らず。』と。曾子曰わく、『君子は思うこと其の位を出でず。』と。」とある。また、『周易』艮卦象伝にも、後者の「曾子曰わく」以下と同様の文がある。また、『中庸章句』第十四章に「君子は其の位に素して行い、其の外を願わず。」とある。政治的、社会的な秩序を重んじることをいう。ちなみに、これが『荘子』になると、例えば逍遥遊篇では、堯が許由に天下を譲ろうとした時、許由が「子、天下を治め、天下既已に治まれり。而るに我、猶お子に代わるは、吾れ将た名の為にせんか。名なる者は実の賓なり。吾れ将た賓の為にせんか。鷦鷯は深林に巣くうも、一枝に過ぎず。偃鼠は河に飲むも、満腹に過ぎず。帰林せんかな君、予、天下を用いて為す所无し。庖人、庖を治めずと雖も、尸祝は樽俎を越えて之れに代わらず。」というような、隠者の自適を強調するものとなる。儒者といえども、政治・社会から遠ざかった位置にいる時は、心境としては、このような考え方と全く無縁ではないと思われる。忘は「忘己」「忘形」「忘我」「忘言」など荘子に頻出する語。例えば『荘子』譲王篇に「故に志を養う者は形を忘れ、形を養う者は利を忘れ、道を致す者は心を忘る。」とある。　○到処…あちこち、それぞれの場所で。　○優游…「有感二首　その二」の【注】(5)を参照。　○超然…群衆から高く抜きんでるさま。世間からかけ離れる、のがれるさま。また、失意のさま。前者の例としては『楚辞』卜居篇に「寧ろ超然として高く挙り、以て貞を保たんか。」とある。また、『老子』第二十六章に「栄観有りと雖も、燕処超然たり。」とある。また、張載の「招隠詩」に「去来時俗を捐て、超然として世偽を辞す。意を得て丘中に在り、安んぞ愚と智とを事とせん。」とある。また、郭象の『荘子注』斉物論篇注に「都て外内を忘れ、然る後に超然として倶に得たり。」とある。また、陶淵明の「勧農」に「若し能く超然として、迹を高軌に投ぜば、敢えて衽を斂めて、敬んで徳の美を讃えざらんや。」とある。また、李白の「東海に勇婦有り」に「剣を学ぶ越の処子、超然として流星の若し。」とある。また、白居易の「史を読む五首」其の二に「商山に黄綺有り、潁川に巣許有り。何ぞ之れに従いて遊び、超然として網罟を離れざる。」とある。同じく「暁に望むに和す」に「歎く我が同心の人、一たび別れて春七たび換るを。相望むに山は隔礙し、去らんと欲するに官は羈絆せり。何れの日か江東に到りて、超然として張翰に似せしむ。」とある。同じく「毛仙翁を送る」に「我が師恵然として来り、道を論じて重玄を窮む。浩蕩として八溟闊く、志は泰にして心超然たり。形骸既に束ること無く、得喪も亦た都て捐つ。」とある。後者の例としては、『荘子』徐无鬼篇に「武侯、超然として対えず。」とあり、司馬彪によると「猶悵然也。」とある。ここでの意味は前者。なお、陶淵明の「晋の故征大将軍の長史孟府君の伝」に「常に神情独り得るに会へば、便ち超然として駕を命じ、巡ちに竜山に之き、景を顧て酣宴し、夕に造りて乃ち帰る。」とある。とすれば、「顧影」は景色を眺めることかもしれない。　○自得…生まれつき、思いのままなさま、快適なさま、得意になる、うぬぼれること。また、体験して悟り理解する、心に得て身に体すること。前者の例としては、『列子』黄帝篇に「黄帝既に寤め、怡然として自得す。」とある。

また、嵇康の「山巨源に与うる絶交書」に「所謂達とは能く善を兼ねて諭わらず、窮すれば則ち自得して悶うる無し。此れを以て之れを観れば、故より堯舜の世に君たる、許由の巖栖する、子房の漢を佐くる、接輿の行歌する、其の揆は一なり。」とある。同じく「唐虞に世道治まれり」に「万国穆親して事無く、賢愚各おの志に自得す。晏然逸豫として忘を内る、佳きかな爾の時喜ぶべし。」とある。同じく「秀才の軍に入るに贈る十九首」其の十四に「俯仰自得し、心を太玄に遊ばしむ。彼の釣叟を嘉し、魚を得て筌を忘る。」とある。また、郭象の『荘子注』も「自得」の思想の展開をみせる。逍遥遊篇注に「夫れ荘子の大意は逍遥遊放、無為にして自得するに在り。故に小大の致を極めて以て性分の適を明らかにす。」とある。同じく天道篇注に「夫れ無為の体は大なり、天下何の為さざる所あらんや。故に主上は冢宰の任を為さざれば、則ち伊、呂は静まりて尹を司り、・・・万民は彼我の能くする所を易えざれば則ち天下の彼我は静まりて自得す。故に天下より以下、庶人に至り、下は昆虫に及び、孰れか能く有為にして成さんや。是の故に弥いよ無為にして弥いよ尊きなり。」とある。郭象の言うのは、人間それぞれの個性、欲望さらには置かれた環境も、みなその人の自然にのっとったものであって、他の人のそれとおきかえることは本来できない、だから人はそれぞれ所与の分限を自覚し、その内部に生きるべきということである。これは、政治的、社会的な組織をつくり出した人間の現実をよくふまえたものと言えよう。また、陶淵明の「始めて鎮軍参軍と作りて曲阿を経る」に「弱齢より事外に寄せ、懐いを委するは琴書に在り。褐を被りて欣びて自得し、屡しば空しきも常に晏如たり。」とある。また、陳後主元秀の「齊人の淳于髡、善く十酒を為す。偶たま之れに效い、独酌謡を作る」其の三に「余罇尽く復た益す、自得するは是れ逍遥なり。」とある。同じく「立春の日舟を玄圃に汎ぶ、各おの一字を賦す、六韻にて篇を成す」に「遥かに看れば柳色嫩らかに、迴かに望めば鳥飛ぶこと高し。自得し欣びて楽しみを為す、意を忘るること濠に臨むが若し。」とある。また、周弘謙の「春夜に五岳の図文を醮（まつ）る」に「熙然として聊か自得し、酒を挹りて浮生を念う。」とある。後者の例として、儒学の「自得」がある。

『孟子』離婁下篇に「孟子曰わく、『君子の深く之れを造むるに道を以てするは、其の之れを自得せんことを欲すればなり。之れを自得すれば、則ち居ること安く、居ること安ければ則ち資（もと）づくこと深く、資づくこと深ければ、則ち之れを左右に取るに其の原に逢う、故に君子は其の之れを自得せんことを欲するなり。』と。」とある。すなわち人間が人間としての正当な道にしたがって学問修養すれば、身にしっかりと会得するところがあって根本がしっかりするのだという。さらに朱子の『集注』によれば、「君子の深造に努めて必ず其の道を以てする者は、其の持循する所有りて以て、夫の黙識心通を俟ち、自然にして之れを己れに得んことを欲すればなり。」すなわち、人間共通の、人間本来の徳は継続的な修養によりおのずから身についてくるのだ、という。続いて程子を引用し、「学は言わずして自得する者は、乃ち自得するなり。安排布置する有る者は、皆な自得するに非ざるなり。(6) 然れば必ず潜心積慮、其の間に優游厭食飫し、然る後に以て得る有るべし。蓋し急迫して之れを求めば、則ち是れ私己のみ、終に以て之れを得るに足らざるなり。」という。程子は、思いを集中し、しかもあせらず、ゆったりとして身につけたもの以外は皆、自分勝手に、できた、わかったと思っているだけだと言うのである。『中庸章句』第十四章にも「君子入るとして自得せざるは無し。」とある。唐詩では例えば、張九齢の「春江の晩景」に「興来れば祇だ自得す、佳気能く伝うる莫し。」とある。また、李白の「江上にて元六林宗に寄す」に「幽賞頗る自得す、興遠くして誰と与にか豁くせん。」とある。また、白居易の「余杭自り帰り淮口に宿して作る」に「行き行きて雲水を弄び、歩き歩きて郷国近し。妻子我が前に在り、琴書我が側に在り。此の外は吾れ知らず、焉くに於てか心自得せん。」とある。また、「陶潜の体に効うの詩十六首」序に「懶放の心、弥いよ自得するを覚ゆ。」とある。同じく「暑を銷す」に「眼前に長物無く、窓下に清風有り。熱散ずるは心静かなるに由り、涼生ずるは室の空しきが為なり。此の時身に自得すれば、更に人と同じきこと難からん。」とある。同じく「秋池に独り汎ぶ」に「悠然として意は自得す、意外何人か知らん。」とある。同じく「将に東都に至らんとし、先づ令狐の留守に

寄す」に「詩境は忽ち来りて還りて自得す、酔郷は潜かに去りて誰と与にか期せん。」とある。　○植杖…杖によりかかる、杖でささえる。『論語』微子篇に「丈人曰わく、『四体勤めず、五穀分たず。孰れをか夫子と為す。』と。其の杖を植して芸る。」とある。また、陶淵明の「癸卯の歳、始春、田舎に懐古す二首」其の一に「是を以て植杖の翁、悠然として復た返らず。理に即しては通識に愧づるも、保つ所は詎ぞ乃ち浅からんや。」とある。同じく「帰去来兮の辞」に「良辰を懐いて以て孤り往き、或いは杖を植てて耘耔す。東皐に登りて以て舒ろに嘯き、清流に臨みて詩を賦す。」とある。　○川流…『論語』子罕篇に「子、川の上に在りて曰わく、『逝く者は斯の如きかな。昼夜を舎かず。』と。」とある。この文の解釈については、吉川幸次郎『論語』に、次のようにある。

「つまり孔子が、流れゆく川の水をまえにして吐いた言葉であるが、全く相反した二つの解釈がある。

過ぎ去る者は、すべてこの川の水の如くであろうか。昼も夜も、一刻の止むときなく、過ぎ去る。人間の生命も、歴史も、この川の水のように、過ぎ去り、うつろってゆく。

以上のように、悲観の言葉として解するのが、一つの説である。古注に引く包咸が、『逝は往也。人の年の往くこと水の流れ逝くが如きを言う。道有りて用い見れざるを痛む也』、というのは一そうはっきりと、その意味である。且つそれによれば、悲観は、孔子自身の不遇によって生まれている。ついで梁の皇侃の『義疏』の説、また皇侃が引用する晋の江熙の説、同じく晋の孫綽の説、みな同じ方向にあり、不断に流れゆく水のごとく、不断に推移する時間の上に、空しく老いゆくわが身を、孔子が嘆いたものとする。（中略）

またかく時間の推移の上にいるなげきを、孔子自身の上にのみ集中していうのは、行きすぎであると感ぜられたためであろう、同じく古注を祖述した宋の刑昺の疏では、『凡そ時の事の逝く者は、此の川の流れの如き夫、昼夜を以っての故に、舎み止まること有らざるなり』と、一般の歴史の推移に対する詠嘆の言葉とする。

何にしても、それらの説は、悲観の語としてこの条を見るのである。ところが一方それらとは全く反対に、人間の希望を語る言葉として、見る説がある。それは宋儒の新注であって、『逝く者は斯くの如き夫、昼夜を舎めず』とは、昼も夜も一刻も停止することのない宇宙の活動は、この川のみずによってこそ、示される。それは無限の持続であり、無限の発展である。人間もまたそうした持続、発展のなかにいる。つまり、『学ぶ者の時時に省察して、毫髪も間り断ゆることなきを欲する』のだと、朱子はいい、程子もまた、これすなわち『易』の『君子は自ずから強めて息まず』であるとする。要するに詠嘆の言葉ではなく、人間の無限の進歩に対する希望の言葉と見るのであって、仁斎が、『君子の徳は、日びに新たにして息わざること、川流の混混として已まざるごときを言う』というのも、宋儒の説におなじい。（中略）

・・・また宋儒のような説は、古い時代にもないことはない。孔子の最初の祖述者である孟子が、『源泉は混混として、昼夜を舎めず、科に盈ちて、而る後に進み、四海に放る、本有る者は是くの如し』というのは、『論語』のこの章、不断の努力、不断の進歩、として読んだからである、と仁斎はいう。また劉宝楠の『正義』の指摘するごとく、漢の揚雄の『法言』の説も、宋儒に近い。

二つの説のちがいを、別の形でいえば、悲観の語と見る説は、『逝者』の二字を、『すぎゆく者』と読むのであり、希望の語と見る説は、『逝者』を、『すすむ者』と読むのである。逝の字の訓詁については、古注を祖述する徂徠も強調するように、おそらく前者の方が正しいであろう。しかし私は、二説は、一方が正しくて、一方が正しくないと、いうのではなく、のちに二つの説となって分裂したごとき思想、あるいは思想というよりもむしろ感情が、元来の孔子の言葉には、円満に含蓄されているのではないかと、考える。」(7) なお、引用された皇侃『論語義疏』には「孔子、川上の上に在りて、川流の迅邁にして未だ嘗て停止せざるを見る。故に人年往去するも亦た復た此くの如きを嘆く。・・・孫緯云わく、・・・川流れて舎てず、年逝きて停まらず。時已に晏きも、而れども道猶お興らず。憂嘆する所以なり。」とある。また、『孟子』離婁下篇の文章は、全文は以下のごとくである。「徐子曰わく、『仲尼は亟し

ば水を称して水なるかな水なるかなと曰う、何をか水に取るや。』と、孟子曰わく、『原泉は混混として昼夜を舍かず、科に盈ちて後に進み、四海に放る。本有る者は是くの如し、是れを之れ取れるのみ、苟しくも本無からしめば、七八月の間に雨集まり、溝澮皆な盈つるとも、其の涸るるや立ちどころにして待つべきなり、故に声聞の情に過ぐるは、君子は之れを恥づるなり。』と。」朱子の『集注』には「水に原本有りて、已まずして漸く進みて以て海に至るは、人の実行有れば則ち亦た已まずして漸く進みて以て極に至るが如きなり。」とある。「川流」の句で端山の言わんとすることは、詩の内容からしても当然、孟子＝朱注の方向にある。なお、孔欣の「高楼の上に置酒す」に「朝日夕べには盛んならざるも、川流は常に宵征す。」とある。

②（四十五）　十月

【原文】

陰窮陽未復、萬物皆帰根。雲影淡平野、日光凝九天。閉蟄深屏息、潜鱗伏無痕。誰言静更静、休説玄又玄。卓哉無極翁、此際契心伝。只這須黙会、妙理不容言。由来無朕兆、庖羲未画前。

【書き下し文】

陰窮まりて陽未だ復せず、萬物皆な根に帰す。雲影は平野に淡く、日光は九天に凝る。閉蟄には深く息を屏め、潜鱗は伏して痕無し。誰か言う静更に静と、説うを休めよ玄の又た玄と。卓なる哉無極翁、此の際に心伝に契う。只だ這れ須く黙会すべし、妙理は言を容れず。由来朕兆無し、庖羲未画の前なり。

【口語訳】

陰の気が満ちて陽の気はまだ戻ってこない。万物はすべてそのおおもとのあり方に帰っていく。雲は平野から淡く見え、太陽は空高く固まったように光っている。冬ごもりの虫たちは地中深く息を潜め、魚たちは水底に隠れて姿も見せない。このような静けさの中に真実はおのずと感じとれるのだから、どうして老荘のように静をきわめよと言う必要があろうか、また、わざわざ真理は奥深いというのもやめにしよう。何と優れていることであろうか、かの周濂渓は。周濂渓の思索と実践は、かの大聖人たちが伝えようとしてきた道にぴったりとかなっている。ひたすら心に悟るべきである。微妙な真理は言葉では表現できない。ものがなぜそうなっていくのか兆しは見えない。それは、あの古の聖人庖羲がつくった易の卦にあらわされる、その大もとのでき事だからである。

【解説】

○「陰陽」について

中国では紀元前から「陰」すなわち女性的な原理のあらわれ、「陽」すなわち男性的な原理のあらわれ、これら二気の交錯、移りかわりによってものが生成変化するというとらえ方によって世界を説明しようとする思想があった。後に五経の一つとされた「易」もこの陰陽説に基くものである。占いによって得られる卦は陰一陽一の二爻の組み合わせによってつくられる（たとえば復卦は䷗）。また、「一陰一陽、之れを道と謂ふ。これを継ぐものは善なり。これを成するものは性なり。」（繫辞上伝）などの著名な論もみられる。時代の下るにつれて陰陽説は木、火、土、金、水の五つの要素を交えて複雑化し、陰陽五行説が盛んになった。漢代になると、政治が乱れることで陰陽の調和が崩れ災異が起こるという考えが流行するまでになった。

では、その陰陽二気は何を起源とするか、絶対的なものが想定されているのかといえば、構造的には宋学の開祖とされる周濂渓の「太極図説」の「無極にして太極」などによって説明が試みられてはいる。ただ、「無極にして太極」という表現に対しては朱子と陸象山との間に論争がかわされるなど陰陽をめぐる問題は宋代になってもつきることはなかった。

いずれにしても陰陽論は中国文化・思想の各方面、中国人の世界観に大きな影響を与え続けてきたことは確かである。参考までに付け加えると、現象の二つの方面、同時におさえようとする発想、見方は陰陽説のみならず、中国では普遍的である。

○「静」の思想について

世界の真理は仮に動静二方面でいえば静の状況下において把握されるという考え方は、一般に中国思想においてよく見られる。『論語』雍也篇に「知者は動き、仁者は静かなり」とあるように、人間性を追究していくと、「仁」を体現した人間は静なるあり方によって存在していることがわかるという。「静」は古くから中国人の基盤であった。ところで、中国思想界においては、「静」に特に着目し、「静」の思想を大々的に展開したのは道家であった。そのことは、『老子』や『荘子』外・雑篇に明らかである。魏晋期になると、老荘思想が隆盛をきわめる。その先駆けとなった王弼は、『老子注』『易注』を著し、老子の思想に基いて「易」をも解釈しようとしたのである。例えば、『老子』十六章の注「虚静を以て其の反復を観る。凡そ有は虚より起こり、動は静より起こる。故に万物に並び動作すと雖も、卒に虚静に復帰す。是れ物の極篤きなり。」、同第四十五章「躁は勝ち寒に、静は熱に勝つ、清静なるは天下の正為り。」の注「躁罷みて然る後寒に勝ち、静無為にして以て熱に勝つ。此れを以て之れを推せば、則ち清静は天下の正為るなり。静なれば則ち物の真を全くし、躁なれば則ち物の性を犯す。故に惟だ清静にして乃ち上の如き諸大を得るなり。」、同第六十一章の注「静にして求めざれば、物は自ら之れに帰す。」、さらには、『周易』復卦象伝「復は其れ天地の心を見るか。」の注「復とは、本に反るの謂なり。天地は本を以て心と為す者なり。凡そ動息めば則ち静、静は動に対する者の非ざるなり。語息めば則ち黙、黙は語に対するに非ざるなり。然らば則ち天地大なりと雖も、富は万物に有り、雲動き風行き、運化万変するも、寂然至无は是れ其の本なり。故に動、地中に息めば、乃ち天地の心見ゆるなり。若し其れ有を以て心と為せば、則ち異類未だ具さに有するを獲ず。」。これらの資料により、王弼の一貫した考え方をうかがうことができる。

晋代以降、空無を説く仏教がこれにからみ、現在「無」の思想などとまとめて呼ばれる思潮が形成された。これに対峙し得る形而上性をそなえ、孔子以来の社会的実践性をも重んじる学問として、儒教は宋代に再生する。例えば、程伊川は、王弼らの静に偏した論理にあきたらず、「一陽下に復するは乃ち天地、物を生ずるの心なり。先儒皆な静を以て天地の心を見ると為す。蓋し動の端は乃ち天地の心なるを知らざるなり。道を知る者に非ざれば、孰が能く之れを識らん。」(『易程伝』復卦象伝注)。と言った。伊川にとって、この世の真理は、「天地」が「物を生ずる」はたらきと不離である。

王弼と伊川との立場との違いは何であろうか。王弼の論を見ると、現象の「本」は何か、その「本」と現象とのかかわり方はどうであるかといった、世界のとらえ方が問題になっていることがわかる。だからといってその論は、現象を厭い根源なるものを好む単なる理想論であるわけではない。いやむしろ現実世界のあり方に即している面がある。政治的、社会的に見ても、異質な万物をまとめようとすれば、一局に偏した特定のとらえ方や行動では対立を呼ぶため不充分である。また、中心となる人物があれこれと物事にかかわることをせず、じっとしておくことでうまくいくことは世の中よくあることである。だから王弼の論は王弼の論で正しい。ただ、その正しさは、宇宙を、社会を、人間をいわばシステムとしてとらえる限りにおいてのものである。前注の郭象と同様にである。つまり一種の結果論なのであり、世の中とはこういうものなのだ、そして、「静」なる根源からのがれられる「動」など最終的にはないのだと言っているのである。これは、人間をも、正しさという一つの観点から、すなわち、いわば外部から見ていることになる。

それに対して、たとえ結果がどうであれ状況にかかわって、その状況において何らかの身体的、心的価値を見出そうとする生き物、それが人間であるとも言える。この立場からは、この地上に次々とものが生まれ変化していくという、もう一つの事実が見える。伊川の言わんとすることは、システムの中で生きている人間そのものの実感をすくいとった論理であると言えよう。同じく現実的とはいっても、王弼と伊川とでは意味合いが違うのである。

ただ、儒学における静の思想の重要性が失われたわけではない。儒学のそれは、静のシステムを説くだけでなく、身心の工夫の中心に静を据えるものなのであった。周濂渓、二程子、李延平、彼から大きな影響を受けた朱子、皆そうである。明代に至っても、陳白沙、聶双江、羅念庵、

高忠憲など、静の伝統は永く続き、中国思想に落ち着きと深みをもたらしたのである。

なお、「一陽来復」については、端山も宋儒の立場に基き、「聖人の学は其の性に復するのみ、蓋し剥尽して一陽来復するは、以て性学最初の手を下す工夫を識るべし」（『端山遺書』巻五、「学習録」上）と言っている。

また、修養論については、端山は、「収斂して発散し、発散して収斂す。一息も休まず、便ち是れ生生たり。」、つまり物事には動に対する静という一つのきまった状態を想定することはできないとしながら、「常に動き常に発するは心の体なり。而れども動かざるは枢紐存すればなり。故に程子曰わく、『動も亦た定、静も亦た定なり。』と。」（同）と言い、心の現象をつらぬく、根源的な意味での静を認める。ゆえに修養は静を基本とし、静を方法として重んじる。「平旦の気は、夜気の存する所なり、殊に性に復する学は静坐収斂より入る。方便の門なり。」（同）「陽明謂えらく、静坐は小学を補う一段の工夫なりと。此の語誠に然り。」（同）「主静の学、本領は涵養なり。吾が儕、下手するは宜しく茲に在るべし。」（同）。こうして「静坐瞑黙して之を観るに上下無きなり、前後無きなり。郭然太虚、天地四方に通じて一糸の妨礙無し。」（同）「静存の功熟すれば便ち是れ動も亦た定、静も亦た定なり。」（同）というところまで熟す。すると、現象の中にありつつ、儒学的な万物一体の世界に達する。「雲白く山青く川行き石立ち花迎え鳥笑い谷答え樵謳す、何等の自然、何等の間寂ぞ。本体は只だ此くの如きのみ、工夫も亦た只だ此くの如きのみ。」（同）「目を閉じ耳に満つる声韵は天理に非ざるは莫く、目を開き眸に満つる形色は天理に非ざるは莫し。便ち是れ天地一団の活溌溌地なり。」（同）「禽獣草木の霊気は即ち人の霊気、人の霊気は即ち我の霊気、我の霊気は即ち造化の霊気なり。便ち是れ天地の間一団の霊々明々の気なり。」（同）「余頃ごろ、濂渓周子主静の学に於いて頗る感ずる所有り。蓋し学は静に本づかずんば則ち功夫は下手の地無し。苟しくも主静にして其の本を立つるを知らば則ち意思安貼たり。所謂万物の一源に於いて我は立つ所有りて中心悦豫す。言語の及ぶ所に有らざるなり。」（同巻六、同下）

なお、仏教も静寂の境地を求めるという通念がある。ただ、「一般の瞎禿子有って、飽くまで飯を喫し了って便ち座禅観行し、年漏を把捉して放起せしめず、喧を厭い静を求む、是れ外道の法なり。祖師云く、爾蓋し心を住して静を看、心を挙して外に照らし、心を摂して内に澄ましめ、心を凝らして定に入る。是の如きの流、皆是れ造作なり、と。」[8]などのように、心を無理に静の境地にしずめて動かさないようにしようとするのは不自然なことだという指摘もあることには注意したい。

○「十月」の詩全体の内容について

「学習録」上に「一日香を焚き静坐すれば頗る覚る、此の心は止水明鏡の如く一般なり、将迎無く、内外無し。此の時に当たりて羽ある者は翔び、鱗ある者は泳ぎ、虫なる者は鳴き、自然に此の心と感通し、心は我が心に非ず、物は彼の物に非ざるなり、と。」とある。これと「十月」の詩の内容は照応する。すなわち、世界とともに心があり、そこにおのずから存在する静なる本質と心とが一体化するから自然と心も静になるのである。

【注】

○陰窮陽未復…『周易』復卦の卦辞に「その道を反復し、七日にして来復す。」とある。古代中国では、世界は陰陽の二気でできており、夏至の日に陰の気が始めて生じ、冬至の日には逆に陽の気が始めて回復する、とする。復の卦は一陽が戻ってくる形であり、月で言えば十一月にあたる。冬至の卦である。　○帰根…根源の状態に復帰すること。もともと老荘思想で使われた語。『老子』第一六章に「虚を致すこと極まり、静を守ること篤く、万物並びに作れども、吾れ以て復るを観る。夫れ物は芸芸たるも、各おの其の根に帰る。根に帰るを静と曰い、是れを命に復ると謂う。命に復るを常と曰い、常を知るを明と曰う。」とある。また、『荘子』知北遊篇に「今、已に物為り。根に帰せんと欲するも、亦た難からずや。其の易きや、其れ唯だ大人のみか。」同じく、「今、彼の神明至精は、彼れと百化す。物已に死生方円ありて、其の根を知る莫きなり。扁然として万物古より以て固より存す。六合は巨為るも、未だ其の

内より離れず。秋豪は小為るも之を待ちて体を成す。天下は沈浮せざるは莫く、終身故ならず。陰陽四時は運行し、各おの其の序を得。惛然として亡きが若くして存し、油然として形あらずして神に、万物は畜われて知らず。此れを之れ本根と謂う。以て観るべし。」とある。また、李白の「十八応四の子挙、落弟して嵩山に還るを送る」に「吾が祖は槀籥を吹く、天人信に森羅たり。根に帰りて太素に復し、群動は元和に熙れり。」とある。　○雲影…雲の形。梁元帝の「夜、柏齋に宿す」に「燭暗くして行人静かに、簾開きて雲影入る。」とある。また、李白の「九日」に「今日雲影好し、水緑にして秋山明かなり。」とある。また、白居易の「百花亭にて晩に望みて夜帰る」に「百花亭の上に晩に裴回す、雲影陰晴し掩いて復た開けり。」とある。　○凝九天…「九天」は天の八方と中央、また、天の最高の所。ここでの意味は、後者であろう。『孫子』形篇に「善く攻むる者は、九天の上に動く。」とある。また、『楚辞』離騒篇に「九天を指して以て正すを為す、夫れ惟だ霊脩の故なり。」とある。また、盧照鄰の「石鏡寺」に「隠隠たり香台の夜、鐘声九天に徹す。」とある。同じく「于の時春なり、慨然として江湖の思い有り、柳九隴に寄贈す」に「水東南の地に去り、気は西北の天に凝る。」とある。また、李白の「廬山の瀑布を望む二首」其の二に「飛流直下三千尺、疑うらくは是れ銀河の九天より落つるかと。」とある。　○閉蟄…虫が土の中にこもって冬眠すること。『左伝』桓公五年に「凡そ祀は啓蟄にして郊し、竜見にて雩し、始めて殺して嘗し、閉蟄にて烝す。」とある。

○屏息…呼吸を抑すること。息を潜めること。気持ちを集中したり、あるいは恐れつつしんだりする意味にもなる。「屏気」に同じ。『論語』郷党篇に「斉を摂げて堂に升るときは、鞠躬如たり。気を屏めて息せざる者に似たり。」とある。また、『列子』黄帝篇に「尹生甚だ怍じ、息を屏むること、良々久しくして、敢えて復た言わず。」とある。また、白居易の「長恨歌」序に「方士屏息して足を斂め、門下に拱手す。」とある。　○潜鱗…水中に潜む魚。王粲の「蔡子篤に贈る」に「潜鱗は淵に在り、帰雁は軒に載る。」とある。また、虞世南の「穎を出で准に至るに奉和す、応令」に「潜鱗は波裏に躍り、水鳥は浪前に沈む。」とある。　○痕…形跡。　○静…落ち着いて動揺しないさま。『論語』雍也篇に「子曰わく、『知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は寿し。』と。」とある。また、『老子』第十六章（前出）、同じく第二十六章に「重きは軽きの根たり、静かなるは躁がしきの君たり。」、同じく第四十五章に「躁は寒に勝ち、静は熱に勝つ。」、同じく第五十七章に「故に聖人云う、我れ無為にして民自のずから化し、我れ静を好みて民自のずから正しく、我れ無事にして民自のずから富み、我れ無欲にして民自のずから樸なり、と。」、同じく第六十一章に「牝は常に静を以て牡に勝ち、静を以て下ることを為す。」とある。また、張九齢の「画ける山水の障に題す」に「心累猶お尽きず、果して物外に牽かる。偶たま耳目の好きに因り、復た丹青の妍なるに伎る。嘗て野間の意を抱き、而して区中の縁に迫る。塵事固に已んぬるかな、意を乗ること終に遷らず。良工は我が願いに適えり、妙墨は巌泉を揮う。変化して群有に合し、高深なること自然に侔し。置陳す北堂の上、倣像す南山の前。静にして戸庭に出ずること無く、行くゆく已に茲の地に偏なり。萱草は憂えて樹うべく、合歓は忿るも亦た鐲く。因る所本と微物、況や乃ち幽筌に憑るをや。言象会に自ら泯び、意色聊か自ら宣ぶ。対玩に佳趣有り、我が心をして渺綿たらしむ。」とある。また、孟浩然の「闇黎の新亭に来りて作る」に「象を案づれば玄は応に悟るべく、言を忘るれば理は必ず該わる。静中何の得る所ぞ、吟詠も也た徒らならんや。」とある。　○玄又玄…「玄」は、奥深いこと。奥深い道理などを表す。『老子』第一章に「道の道とすべきは常の道に非ず、名の名とす可きは常の名に非ず。名無し、天地の始めには、名有り、万物の母には。故に常に無欲にして以て其の妙を観、常に有欲にして以て其の徼を観る。此の両者は、同じく出でて名を異にし、同じく之を玄と謂う。玄の又た玄、衆妙の門なり。」とある。また、孟浩然の「精思観に遊び主山房に題す」に「漸く玄妙の理に通じ、深く坐忘の心を得たり。」とある。　○無極翁…『老子』第二十八章に「其の白を知りて、其の黒を守れば、天下の式と為る。天下の式と為れば、常徳忒わず、無極に復帰す。」とある。なお「無極翁」とは宋学の開祖、周濂渓（一〇一七～

一〇七三）のこと。その周濂渓の「太極図説」に「無極にして太極。太極動きて陽を生じ、動極まりて静、静にして陰を生ず。・・・陰陽は一太極なり、太極は本と無極なり。」とある。　○心伝…もと仏教語。「以心伝心」のこと。黄檗『伝心法要』巻上など参照。宋儒は聖人の道を表現した言葉として『尚書』大禹謨篇の「人心惟れ危し、道心惟れ微かなり、惟れ精惟れ一、允に其の中を執れ。」を重視し、大聖人の堯舜から禹へと伝えられた心伝とした。これを「十六字心伝」「虞庭の伝心訣」などと言う。　○妙理…『老子』『荘子』などに、天地宇宙の微妙な真理は言語表現できないと言う。後、中国に流入した仏教も同様。　○由来…これまでの経過、わけ、原因。また、元来、もともと。ここでは前者後者どちらにもとれる。訳は確定しにくい。『周易』坤卦文言伝に「其の由りて来たる所の者漸くす。」とある。また、張九齢の「晨に郡舎の林下に出づ」に「晨に興に北林を歩み、蕭散一たび襟を開く。復た見る林上の月、娟娟として猶お未だ沈まず。片雲自ら孤遠にして、叢篠亦た清深なり。無事なること由来貴し、方に知る物外の心を。」とある。同じく「聖製早に三郷を発して山行するに奉和す」に「聖徳は由来天道に合し、霊符は即ち此れ時に応じて巡る。」とある。　○朕兆…きざし、予兆。左思の「魏都賦」（『文選』巻六）に「是を以て振古に兆朕し、疇昔に萌柢す。」とある。その李善注に引く『淮南子』俶真訓に「物と接せんと欲して未だ兆朕を成さざるなり。」とある。　○庖羲未画前…「夏日読易雑詩　その二」【注】(9)を参照のこと。

注

（1）　都城市立妻ヶ丘中学校国語科教諭。

（2）　鹿児島高等学校国語科教諭。

（3）　『楠本端山・碩水全集　全一巻』（岡田武彦他編集、葦書房、一九八〇年）

（4）　本『研究報告』第三十八号、六十頁

（5）　本『研究報告』第三十八号、五十六頁～五十七頁

（6）　和刻本『二程全書』巻十二「遺書」五丁b

（7）　朝日「中国古典選文庫」3『論語』上三〇七頁～三一〇頁

（8）　岩波文庫『臨済録』（入矢義高訳注）「示衆」七十五頁

（9）　本『研究報告』第三十七号、三十七頁

（平成二十年九月三十日受理）